

風 葬 の 島

水 口 清 一

鹿児島をへだてること約400軒、船にて一中夜……、そこに奄美群島が点在する。奄美群島のはば中央に周囲85軒余、面積247平方軒、全体が隆起珊瑚礁より成る墮円形の島が浮んでいる。これが徳之島だ。

徳之島は東支那海、太平洋に面し年間平均気温が20度前後という恵まれた気候状態にあり米、サツマイモ、パイン、バナナ、サトウキビ等の熱帯植物を有する美しい常夏の島である。白波打ち寄せる珊瑚礁の海岸、紺碧の空と海、熱帯樹の中の集落、これらがかもしだす南国情緒は旅ゆく人の心をとらえてはなさない。地質的にはいわゆる中央帯に属し、古生層、中生層及びこれら貫く古い輝緑岩類の岩石が島の骨格をなしている。人口は5万余人で現在徳之島町天城町、伊仙町の3カ町より成っている。

徳之島の現実生活においていかなる民間信仰が存在しているのだろうか。調査にあたり我々は直接民家を訪問することができたのは何よりも力強いことである。

民間信仰の中には俗信や迷信がある。俗信と迷信とは同意語として使用されている。これは時代、場所、または環境に応じて俗信は迷信となりうる可能性があるからである。社会は絶えず変化し、これに応じて人の信仰も変化してゆく、故にこうした心意現象を概念的に区別しても意味のないことである。

「民間信仰」の著者堀一郎氏によると「高い哲学や倫理をふくむ教理をもつ宗教を生み、あるいはこれを理解し受容した文明社会における民間信仰は、純粋な未開社会における自然宗教に比して様相は複雑化し、それぞれの下部構造に付着するか、その擬似形態をとるかまたは高い宗教の圧迫を受けて俗信化せられて民衆の低い宗教心意の中にその根をおろしたものである」と規定している。民間信仰は非科学的思考から自然現象に呪力があると信じることから出発している。民間信仰を探ることによつてこの地の過去（又は現在）の社会生活を明らかにすることができるだろう。なぜなら人々は小さな部落単位に共同生活を行い、生活は強く自然に支配され、又封鎖的でその社会の内部においてのみ行

動を起すからである。

科学の未発達の時代に於て生産（主に農業、林業）と信仰の結びつきは人々に安心して生業にいそしむための糧となつていたのである（徳之島はほとんどがキビの栽培にあたっている。）豊作を祈つたり祝つたりする行事、あるいは豊作を確実にしようとする予祝の行事、その年の各月の天候を占う行事、霜害や虫害、台風、その他の天災を防ぐための行事又は雨乞、日照を祈る行事等々種々様々な行事がある。中山部落では「アングネ」と称して畑に竹をさしたりススキをさしたりして害虫を供養する日がある。この日は畑に足を踏み入れたりするとハブにやられるといつて誰も近づこうとはしない。このアングネと称するのは当初播種祭の一行事であつたといわれている。この他に全島にわたつて大工祭や山祭というのがあつて、この日は仕事を休み自分達の使用する仕事道具をそれぞれならべオミキなどを上げて祝うものである。人々は生産が無事に達成されるよう敬虔な心で神霊の加護を祈っているのでこうした生産にかかわる禁忌が生じるのである。すべてこうした信仰行事は毎日の単調なげいし労働にうるおいを与え、明日への労働力をたくわえるのに役立つことだろう。

徳之島には稲作儀礼の三大多行事の一つに「浜下り」という神事がある。この行事は徳之島独特のものであるといわれている。この神事は部落単位の共同祭礼ではなく、先祖を同じくする血縁グループを単位としている。浜下りの行われるのは^ひ丁の日に^と浜に^{つち}下り^え戌の日に家に帰るものである。これは火をつけて浜に下り、土を踏んで上るという意味だそうである。丁の日になれば親籍一同が浜に出て岩窟を利用して簡単な祭壇をつくる。井之川部落ではハマオリヤドリと称する小屋を作つて祭壇を設けている所もある。これに利用する岩窟は各々の血縁グループでキチンと決められているのである。親籍一同は祭壇の前に着座し各自持ち合わせた酒食を祭壇の上に置いてその一族の代表者が来年の豊作を祈願する。そして一日中喰つたり、飲んだりして楽しく過ごすのである。翌日は一旦帰宅して又ごちそうを携えて浜に下りてくる。この日は闘牛、角力、踊りなどで楽しむ慣例である。この時はもう血縁グループは解かれて他のグループの者達と一諸に楽しむ、舟などを海にもち出して海水をかけ合うものもある。

以上が浜下りの説明になるが、島民達はこの神事を最も楽しい祭としている。この島は昔から闘牛や角力が盛んな島である。かの有名な朝夕園は井之川部落

の出身である。角力や闘牛は祭の中の一行事として行れてきたが、今ではそれ自体が一つの行事となつている。

風葬から土葬へ

伊仙町に通ずる山道から少し離れたところを樹木をかき分け進んでいくと、うつそうと茂つた樹林の間に小さな洞穴がある。洞内は薄暗く何か神秘感を漂わせている。我々はその中に死の世界を見たのである。そこには何千体という人骨が折り重なつて散乱していた。何と不気味な光景であろうか……………。

これが風葬と呼ばれるものである。徳之島のあちこちの山腹にこの様な風葬が16カ所も見受けられる。土地の人々はたたりがあるといつて近づこうとはしない。風葬は死者の遺体を席に包んだり又は棺などに納めて山野、洞窟等に置いて空中に晒し、3.6.7.年を経てその骸骨を洗い清めて再葬するものである。これを2重葬制又は複葬制と呼んでいる。この風葬習俗は南島に発生したものではなく日本本土に於ても慣行されていたといわれる。

近年大分県、和歌山県、八丈島などから土葬をした後かなりの年月を経てから遺骨を清めて改葬する習わしのあることが知られるようになり、両者の関連がしだいに明らかにされようとしているのである。現在徳之島に存在する風葬跡には4つの説がある

- 昔薩摩と琉球とが戦つた時にその戦死者を1カ所に集めたものである。
 - 天保のキキンの折、餓死したものを1カ所に集めたものである。
 - 神女が自分達の仕事のためにあちらこちらの遺骨を1カ所に集めたものである。
 - 過去に於て疫病が流行し、その時の死者を1カ所に集めたものである。
- 真相は今だ不明だがおそらくこの4つの説のどれかに該当するだろうと思われる。

いづれにしても現在の住民とは直接的には無関係のものである。しかし中山部落においてはこれ等を祖先の霊としてお祭りしている。だから今でも人が死ぬとこの部落では改葬の後この風葬跡に納骨している。その他のものは現在では観光の一要因をなしているに過ぎない。万葉集の中で柿本人麻呂は

奥つ波来よる荒磯^{しきたえ}を敷^ま妙の枕^なを^な経きて寝せる君かも

と風葬を詠んでいる。

風葬に変わって次に出てくるのが土葬である。現在亀徳部落の共同墓地のやや中央に「ノロの墓」と称する墓碑が建立されている。石材が山川石と称する風化しやすい脆弱な石質であるために墓石の形状もひずんで原形を失っている。彫刻の文字は今では消失し、僅かに寛政の2字が判読できたところから寛政年間のものであらうと推知されている。この墓碑はインダガネの土葬墓碑といわれ今の徳之島町亀徳部落に昔インダガネという美人がおりその遺体を風葬に附するのにはあまりにも忍びなかつたので埋葬にしたのだと伝えられている。これが徳之島最初の土葬だといわれている。今も奄美群島においての葬送習俗は土葬である。

人間にとって死はほど平等で冷酷な事実はない。この恐怖からのがれようとして人々は神を祭り、神の創造物である自然を祭ろうとしたのである。人が死ぬ時には必ず予兆があると信じられていた。これは自然に現われる現象によつて未知の事実、将来に起きるであらう事件を予想し、あるいは予知しうるという信仰にもとづくものである。親が死んで子供に知らせない場合、その子供は必ずけがをすると信じられている。

徳之島では葬式をどのように行うのであらうか、ある部落の長老のお話をここにまとめてみることにする。

昔は人が死に棺に納めると、馬にハオク（ワラ）をかぶせて、馬が墓地まで導いて行く。その後を親族一同がゲタやちようちんを持ち、坊主が笛を吹きながら参列したそうである。埋葬をすまし家に帰つてくると、タタミを上げ庭にだして馬にまたがす。その後馬のたずなを家内まで引張り、馬をどこかにおい払つてしまう。又馬の持主も家の裏にあるところの水がめをひつくり返して消えてしまう。これで葬式が完了するのである。

今ではこの様な面倒なことは行わないそうである。死体とともに納入する副葬品はところにより異つているが大体日用品と託送品とに分けることができる。古いゲタ（片齒）やぞうり、傘などがそれにあたる。馬根部落のようにタタミのうらの竹、針、銭、ごはん、タバコ、料理した卵など入れるところもある。死人を納棺するときに背中の中を少し破つた着物を裏返しにして着せる。これは死人が裏から呼吸をするためだといわれている。又縁故者も裏にした着

物を身につけ、墓場まで行くそうである。埋葬を行う5分ぐらい前に中山、亀津部落ではかわいそうにと泣きながら「ウモイ」と称する唄をうたう。これは女だけが唄うものであるが、これは非常にさびしく哀調を帯びたものである。夜などに聞くと気持ちが悪いものだと言土地の人はいつている。唄い終ると深さ2～4米のところに埋められる。3年目に改葬が行われ、頭骸骨はカメの中に納められる。

琉球人は直径1.5尺、高さ4尺の南蛮ガメに納められた。その後5.1 3.2 5.3 3年忌を迎え終ると墓参りはしなくてもよいことになっている。33年忌には関係者一同が墓参りをして別れのさかずきをかわすのである。その時3センチ平方、長さ50センチ米の四角い椎の木に33の切口を入れて墓石に立てる。この切り口は死者が天国へ行く時の階段となるのである。この島では墓地を広めたら死人が増すといつて墓石は代々一つにしている。

最近では新興宗教が入りこれらの習俗も時代とともに次第に崩壊しつつある。日本の最南端にあるこの島が時代の流れの中に将来どのように変貌していくか興味深いものである。再びこの地を訪ねる機会があることを願つてペンを置く。

やすい／ うまい．／ それにええムードしてゐる．／／／

軽食堂



大学前通り